老年保健看護

報告者：山口　初代

教育及び実践の課題

教育及び実践の課題として、地域在住高齢者のつながりを対象理解の視点として取り入れ、実践につなげていくための教育があがった。高齢者のつながりについては、地域在住の自立高齢者を対象とする「老年保健看護実習Ⅰ」で、位置づけてきた。しかし、対象者の情報として人とのつながりについて記載する項目はなく、日々の実習記録や課題レポートで記載されたものに対して、各教員がコメントするのに留まっていた。また、人とのつながりだけでなく、いくつになっても社会へ貢献したいという社会参加についても、充分に取り上げられていないことが課題としてあげられた。そのため、地域在住高齢者のつながりと社会貢献に関するアセスメントが不十分であることが課題としてあげられた。

活用した論文の概要

活用した論文は、Register ME(2010)の「地域在住高齢者のつながり」であり、地域在住高齢者のつながりに関与するプロセスを調査し、生成的な観点から、QOL の向上について検討することを目的とし、研究参加者 12 名に対するグランデッドセオリーアプローチが用いられた。

地域在住高齢者のつながりとして、(a)何かすることをもっている、(b)関係をもっている、(c)未来に向けて社会参加している、(d)継続の感覚を持っている、の 4 つのプロセスが導かれ、地域在住高齢者のつながりは、場と空間を超えて、高齢者の孤立化を防ぐことに役立つという内容であった。

高齢者は、活気のあるつながりが失われた時に、生活しづらくなる一方で、健康信念、健康行動、健康状態につながりの影響を受ける傾向がある。専門職は、高齢者のつながりの再生・強化のために、役割を果たすことの重要性を理解する必要があることが示唆された。

教育及び実践への活用

教育及び実践への活用として、「老年保健看護実習Ⅰ」において、対象理解を広げるために、アセスメント項目に人とのつながりと社会参加の項目を追加した。その結果、学生は、人とのつながりとして、“孫・ひ孫の世話”、“三線を教えている児童とのつながり”等、社会参加として、“過去の仕事を活かした生活”、“同窓会や慰霊祭に参加”等の情報を必ず記載していた。その多彩な情報は、整理され、人・地域とのつながり等、個別のアセスメントに繋げられていた。

施設や病院などで療養生活を送る要介護高齢者は、つながりが途切れやすい状況にある。看護職者は、つながりを再生し、強化する支援を意識化する必要がある。そのため、要介護高齢者を対象とする「老年保健看護実習Ⅱ」では、自立高齢者のつながりの学びを基盤として、要介護高齢者であっても、つながりに着目し、つながりたい対象や社会に貢献できるような教育をする予定である。

参考文献*

Register ME and Scharer KM（2010）：Connectedness in Community-Dwelling Older Adults, Western Journal of Nursing Research, 32(4), 462-479.